

# 「近代日本の国際交流」

企画・編集委員 武田 秀章

本年三月十一日に発生した東日本大震災、それに続く福島第一原発事故は、戦後日本最悪の大災害であった。放射能による汚染は全国に波及し、被災地復興の手立ては遅々として進んでいない。アメリカにとつての9・11と同様、3・11は、日本人の心に癒し難い傷跡を残した。

しかしその極限状況の渦中で、東北の無名の被災者たちが示した忍耐と秩序、静かな品位は、世界中の人々に深い感銘を与えた。このような行動様式は、決して一朝一夕のものではなく、日本の長い歴史の中で培われてきたものであろう。

顧みれば、明治維新に際して、日本人が全員参加で成し遂げた「国作り」の偉業も、当時の国際社会に多大の反響を呼び起こした。明治の先人は、西洋列強の無慈悲な力をしっかりと受け止め、有色人種として始めて国家の独立を全うするという、稀有の偉業をやつてのけた。日本の国際社会への参画は、それまでの世界史の流れに、大きな転換を齎したのである。

われわれの父祖は、極東の一小国にすぎなかった日本の姿を、ありのままに直視する勇氣を持っていた。苛酷な国際社会で国を立ててゆくためには、結局「セルフヘルプ・自助努力」に徹する以外にないことを、肝に銘じていた。ここにおいて、一国の興廃と、国民の命運は、しっかりと結びつけられていたのだ

ある。

今日の日本人は、明治人が持っていたこの切羽詰まった思いを、ともしば見失っているのかもしれない。しかしわれわれは、近代の歴史を顧みることによって、なお「明治立国の精神」を思い出すことはできるのである。

本号は、こうした問題意識から「近代日本の国際交流」と題する特集を組んだ。六編の特集論文は、いずれも明治の国際交渉の軌跡を、具に跡付けるものである。いずれも貴重な労作であるが、とりわけ碩学が心をこめて描く青木周蔵や井上馨、井上毅の深沈たるプロフィールが感銘深い。

五編の個別論文も、すべて明治の精神文化に関わる論考である。各論を通読すれば、皇室のもとでの東西文明の融合を目指した「明治の理想」の輪郭が、自ずから明らかとなろう。

本号掲載の講演・随想、書評・紹介も、それぞれ明治文化史研究・近代史研究に貴重な論点を提供するものである。巻末の資料紹介は、明治の皇室文化の風韻を伝える興味深い資料を公にしている。

それにしても、明治の国作りに際して、また此度の震災に際して、期せずして発揮された名もなき日本人の「静かな勁さ」の根元はどこにあるのだろうか。その手掛かりは、やはり日本人が懸命に生き抜いてきた近代日本の歴史そのものの中に秘められているに違いない。本学会の衆智を結集し、引き続きこの課題の解明に向けて取り組んでいきたい。

（國學院大學神道文化学部教授）